

# ■ものづくり人材育成のご案内

## ～企業の課題に対応したオーダーメイド研修～

### ものづくり 人材育成

研究員と一緒に  
研修内容を企画

「ものづくり人材育成塾」は、県内企業の皆様が抱える個別の技術的課題の解決を通じて技術力向上を図るオーダーメイド型の人材育成コースです。令和3年度は30企業、40名の方が参加され、技術習得を基にした製品開発や品質改善等に繋げておられ、参加者や経営者から高い評価を得ています。

詳しくは、研究員にご相談ください。



事業内容や受入  
分野はこちらから

研修期間は、課題に応じて3、6、9、12ヶ月の4期間

参加費：1人あたり2,000円/月

コース	内容
課題解決手法習得コース	企業技術者がセンター研究員の助言により、自社内で抱える技術課題を解決する手法を習得することができます。コースは21コース。詳しくは、産業技術センターHPをご覧ください。
AI・IoT・ロボット技術習得コース	AI・IoT・ロボット技術を製造現場に導入しようとする企業の技術者が、センター職員の助言により、具体的な技術課題について検討することで、導入に必要な知識やスキルを習得することができます。
水産加工開発コース	水産物加工に関する具体的な技術課題について、企業の技術者がセンター研究員の助言により検討を実施することで、必要な知識やスキルを習得することができます。

## 〔参加された企業の事例紹介〕

### ■アロー産業株式会社

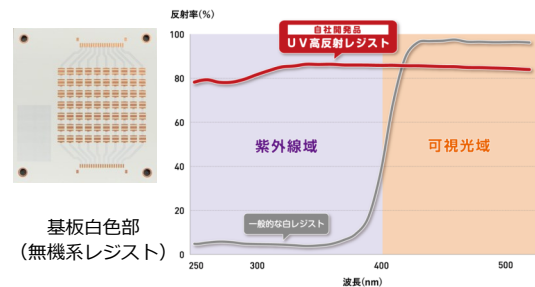
#### ～紫外域において高反射率を持つ無機塗料の開発

参加企業は、産業機器用、半導体ベアチップ実装用基板および民生用の各種基板を製造販売しています。同社は、近年、耐紫外線（UV）特性への要求が高まっていることから、高UV反射を有する無機材料をベースとした基板用レジスト塗料の開発を目的として、ものづくり人材育成塾（令和元年度）を受講されました。

基板用レジスト塗料の開発にあたり、企業担当者とセンター研究員が一緒に取り組み、ベースとなる樹脂の組成配合からUV反射率や塗膜性能評価までの技術を習得されました。その結果、紫外域（250～400nm）での反射率が80～90%の基板用レジストを開発されました。

現在は、ものづくり人材育成塾の受講をきっかけに、令和3年度より、同社と当センターとの共同研究へ発展し、基板用レジスト塗料のUV反射率のさらなる性能向上に向け取り組んでいます。

（担当：有機材料グループ 主任研究員 山本）



UV高反射レジスト基板(アロー産業 HPより)

### 参加者の声

ものづくり人材育成塾を受講したことで、無機系レジストインクの組成から評価までの技術を習得でき、無機系レジストインクの開発を進展させることができました。引き続き、ご指導よろしく申し上げます。

（会長 矢谷 英志氏）

**株式会社ワールドウィングエンタープライズ**  
 ～ソール形状が足圧分布に及ぼす影響の評価

3D スキャナ、3DCAD、3D プリントなどの 3 次元関連技術を用いてシューズのソールを試作しました。

そして、試作したシューズを実際に履いて歩行したときの足圧分布を測定し、シューズのソール形状が足圧分布にどのような影響を与えるか検証しました。

通常大掛かりな設備が必要なシューズの試作が、最小限の設備で迅速に行うことが可能になりました。

(担当：機械・計測制御グループ 研究員 亀崎)



3D スキャンしたソール



製品（左）と試作したソール（右）

参加者の声

一連の 3 次元関連技術について教えていただき、それらの技術を用いてシューズの試作開発が社内でもできるようになりました。これまで行ってきた試作開発よりも開発スピードが速くなり、試作したシューズの検証や改良に迅速に取り組むことができるようになりました。

(指導室 長谷川 慶行氏)

**株式会社角屋食品**  
 ～アジフライの科学的評価

参加企業は、主力製品であるアジフライの特徴を「境港産」「ていねいな仕事」と PR しておられます。

製品の特徴を科学的に解明するため、ものづくり人材育成塾を 1 年間受講され、自社製品と競合他社製品を味や食感、香りなど、できるだけ多くの観点からセンター保有の様々な機器を使って数値化しました。

その結果、自社製品と競合他社製品の違いを客観的に評価、見える化することが可能になりました。

(担当：水畜産食品グループ グループ長 加藤)



角屋食品「アジフライ」

参加者の声

様々な分析手法や結果の解釈など、基礎から丁寧に教えていただき、食品科学の基本を身に付けることが出来ました。

また、専門的な理化学機器の分析から、計画段階で想定していた以上の発見があり、大きな収穫となりました。今回の知見を、今後の開発にも活かしたいと考えています。

(研究開発部 岩田 いづみ氏)

